

## 2026\_0604「尾曳巻雲」日々の理科 4316号

お茶の水女子大学 サイエンス&エデュケーション研究所 田中 千尋

北軽井沢の森の上に広がる空を見上げると、まるで白い羽毛を幾重にも重ねたような巻雲が広がっていました。この雲は氷の結晶からできる高い空の雲で、写真のものは特に尾を曳くように細長く伸びる尾曳巻雲（おびきけんうん）の特徴をよく示しています。地上では穏やかな夕暮れでも、高度一万メートル近い上空には強い風が吹いており、その流れに乗って氷晶が引き延ばされることで、このような繊細な模様が生まれます。

北軽井沢は標高千メートル前後の高原に位置するため、空が広く感じられ、上層の雲の変化にも気付きやすい場所です。五月下旬になると新緑が濃さを増し、森の木々はすっかり初夏の装いになりますが、空の上ではまだ春から夏への移り変わりが続いています。巻雲は天気の大きな変化に先立って現れることも多く、古くから人々はその姿を見て空模様を予想してきました。

この日は西日に照らされた雲が淡く輝き、青空との対比がとても印象的でした。樹林の黒いシルエットの上に広がる白い筋雲は、まるで見えない筆で描かれた一枚の絵のようです。刻々と形を変えながら流れてゆく姿を眺めていると、高原の静けさの中にも、大気が絶えず動き続けていることを実感します。北軽井沢ならではの澄んだ空気が、そんな空の表情をいっそう鮮やかに見せてくれました。

(2026年5月下旬／北軽井沢)

